

日本語教育実践研究 (11)

—「聴解教育」の実践—

吉岡 英幸

日本語教育実践研究 (11) は、聴解教育について、実際の日本語聴解クラスにおける教育活動を通じて、教材作成や具体的な指導の方法などを研究するための科目です。主として中級から上級レベルの日本語聴解クラス（聴解6Aクラス）を実習の場として、参与観察や授業の一部の指導を担当します。

2004年秋学期の聴解6Aクラスの登録学生は14名で、クラスの主な目標は、

- 中上級語彙の習得(講義などで使用される書き言葉的表現や、ややくだけた話し言葉も含む)
- ニュースなどの正確な聞きとりと再生
- まとまった話(講義を目標とする)の要旨把握
- 未知の語の推測

です。使用教材はビデオとし、主にNIIKの「首都圏ニュース」から選びました。学期の前半は2・3分の長さの首都圏リレーニュースを、後半は8分前後の特集から選んだものを使用しました。

受講生は15名で、三つのグループに分かれ、グループで教材作成と授業の指導案作成を行いました。グループ作業はまず、手分けをしてテレビ番組を録画し、選んだものを持ち寄って適当かどうかを検討します。教材としての候補が決まると、教師がチェックして採用できるかどうかを最終的に判断します。教材が決まると正確なスクリプトを作成し、具体的な授業の指導案及び必要なワークシートなどを作成し、それを教師がチェックして完成させます。そして、その教材を使用する授業のとき、担当グループが授業の1部の指導を分担します。指導部分は、学期の前半は新出語彙の意味説明などが中心でしたが、学期の後半には練習の発展練習の部分を担当しました。

受講生は全員、毎週参加した日本語クラスの授業についてレポートを書き、提出することを義務としました。そして、教師はそれをチェックし、質問に対する回答など、説明の必要なことならについては、翌週の実践研究の授業でフィードバックしました。そして、学期末には、体験した実践研究についてのまとめをレポートとして提出することを課題としました。今回聴解教育の実践として載せた論考は、学期末のレポートの中から実践研究の実態がよくわかると同時に、聴解指導についての自分の考えを明確にまとめたものを選びました。

(ヨシオカ ヒデユキ・日本語教育研究科教授)